
【詩集】かんりん

布袋しぐれ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

【詩集】 かんりん

【Nコード】

N2167Y

【作者名】

布袋しぐれ

【あらすじ】

布袋しぐれの詩集、第二弾、『かんりん』

作品名は生まれの季語から頂きました。

感じるままに

広がってゆく

世界

空っ風の

ぞうぞうと

新たな歩みを

始めよと

風が鳴く

空が歌う

そうして

揺られる葉が

私に問いかける

お前はどこへ行きたいのか

お前はなにになりたいのか

そう問われて

私は少し躊躇して

きつと

自信を持って

答えた

少し小さな声にならない

声で

私は私の野望を果たしたい

抱いていた夢を叶えたい

時はきたり

チャンスもなにもかも

我が手中にあり

何も恐れることはない

きつと

憂うこともない

このまま突き進めばいい

私らしく

力強く

歩み続けることを

恐れるなと

私はそう

いわれた気がするのだ

からだ

今日のからだは好きだな

ここの厚さが気に入らないな

でもこの部分のこの触り心地は好きかも

毎日のように

鏡の前で

自分のウエストと格闘する

モデルみたいに

薄いウエストじゃないし

アイドルみたいに

キレイにくびれてる

ウエストじゃないから

憧れは強い

自制心はチヨット弱め

意識は強いけれど

憧れは時々

チヨット弱め

ここのこの感じ好きじゃない

あんまり揺れてて形が悪い

気に入らないな

毎日のように
見下ろして
他人と比べる脚

最近流行りの歌手みたいに
ほっそり素敵な脚じゃない
今頃の人みたいに長めな
人形美脚でもない

思いは強くて
憧れも強くて
理想は高めな
わがままな
私にひつつく
現実ボディ
これはこれでいい
そう思える日がくるのだろうか

充実感

疲れてて

疲労もたまつて

いっぱいいっぱい

だらしない

だらつとしたくなるくらい

起き上がりたくなるくらい

それくらい疲れると

なんだか

満たされているなあつて

そう感じる

最近

そう思うようになった

歳を重ねてきたせいなのか

どうだか分からないが

満たされた感じが味わえるというのは

実に幸せだと思える

虚しさも

日々の生活で

混沌と

忙しい

辛い

疲れた

痛い

そういう

全て乗り越えられれば

それが充実感にやがて変わることを

私は知っているつもり

幸せ

これは幸せ

そしてこれは充実感

きつと満たされている証拠だって

私は分かる気がする

ふと

短い

その一瞬

その瞬間

いつときだけ

短いそのときだけ

不意に

寂しさに駆られて

ひとりだと

痛いほど

この胸に刺さる言葉がある

届きませんか

届けられませんか

届かなくてもいい

眠ったままの想いでいい

あなたに向けた

その視線ひとつ

枯れることもなく

衰えることもない

ひかりを宿して

一夜限りの恋でも

いっそう

構わないと思った

私は誑たぶらかしたつもりはないのに
周りはそういう
愛がないと生きていけないのはきつと
皆同じはずなのに
私は道を踏み外したみたいに
思いもまるで一瞬で
軽いみたいに

そうじゃない
一生懸命に愛しても
返ってこない感情なんて
ほしい反応がほしいだけで
ほしいものはほしい
まるで駄々こねる
赤子のような
そういわれても仕方ないから
私は思い焦がれた
理想の形の愛がほしくなるの

一夜限りでもいい
まるで女郎かなんかみたいに
軽い
安っぽい愛でも構わないと思う
あなたが一瞬でも
私のために存在して
私だけを見て
私だけのために囁いてくれるのならば

声

聞きたい声がある
抱きしめてほしいくらい
聞いてみたい
偶像みたいな声がある

幻なのだろうか
文字のおこりから
あなたの声がするみたい

優しく深く響く声は
温かく
冷たく
そうして
ぼんやりと
染み渡る

あなたの声がすき
あなたの声が聞いてみたい
あなたはどんな声なの

形いっぱい
温かさも違って

ああ

恋も多い私だから

こっやって少しの破片にも
恋しちゃうんだろうね

ああ

愛おしい

懐かしいみたいに
よく響く

恋しちゃったんだろうね

あなたの

聞こえない
声に

マイナス

やめたいなって
ふと思う
そういう瞬間が
あったりして

目の前のことに集中したいって
思ったりする

ああ
案外、ちっぽけだったって
どうしようもできないって

なんだろう
あべこべだけれど
そう考えてしまう瞬間がある

リセットしたい
新しい自分に出くわしてみたい

私は次のとき
どうなるんだろうか

新しい刺激を求めるために

この瞬間を生きて

それはプラスに向うための
マイナスからの脱却
きつと
そう

マイナスは今のためにある
ブルーな気持ち
ただそれにすぎない

憂鬱

心が頭が
深いブルーに占められて
温かさも
何もかも
失っていくみたいに

これがマイナスの世界なんだろうな
ぼやっと
そう感じて

一生懸命であることが
少し
面倒になる

キリリ

空っぽだった胃に
モノが流れ込む
加減もなく
たっぷりと

たぷつと
波打つ
胃の中
途端にキリリと痛み出す

優しくないな
この食べ物

口に含むことを
少し躊躇する
食べたくない
胃が痛い
それだけだけれど
かなりの打撃

痛い
痛い
食事をしたことを後悔した

食事をしていないほうが
マシだと思った
胃のせり上がりとか
そういうのが辛い

どうして食べなくてはいけないの
どうして太ってしまうの

遺伝子の悩みって
一種

尽きないところがあると思う

何を食べても太る人と
何を食べても太らない人って
生きる道も違ってしまう
苦しいものだなあ

生きるため
食べて
苦しむんだろっな

正義

誰が正しいか
誰が良い人か
分からなくなつた
この時代に

清く正しく
真つ直ぐに
そう生きるだけが
術じゃないと
悪人が詠うようだ

正しく生きれば
自分だけが損をするかもしれない
そういう世の中だから

騙すのも騙されるのも
ひとえに運命だと
そう悪人が言うようだ

正義を詠つたのは
いつの日か
正義だけが正しくないと
そう思えたのは

いつの日からか

正義を過信するな
そう言いたげなのは
悪人か善人か

正義は最早
英雄ではない

少なくとも人は
これからを
正義のみにかけて
生きれないという
揺ぎない
世の中の裏腹な事実
に
苦しむのだろう

あなた一色

こんなに早く
掌返すように
感情も変わるなんて
思わなかった
こんな自分
知らなかった
私らしくもない
もうすっかり薄れた感覚
白く
清く
キレイでいること

思っていた以上に
私は汚れていて
頭の中で
必死に駆け引きして
振り向かせようと
まるで一生懸命
全てを賭けた様に
元の自分は全て押し殺して
何も
少しも
振り向かないあなたに苛立って

いつからか

この感情が
単なる高鳴りと
期待と
憧れから
素直な恋心へ
相手にされないと
知っていても
私は
諦められなかったみたい
あなたの袖を握る
他の大人の女性が
羨ましかった

きっと
大人をからかってはいけないとか
そういつて
相手になんかしてくれないのだろうに
私の心も知らないで
あなたがどんどん
この頭を支配していく

お馬鹿ちゃん

あなたなんかに言われたくないよ
後ろ指差してる余裕あるの

私があなたより

劣っているなんて

可笑しな話

馬鹿げた話

あなたのものさしで

はからないで

あなたの目はこれっぽっちも

正しくなんかいないだから

お馬鹿ちゃん

悲しいお馬鹿ちゃん

うぬぼれるなつて

どの口が吐いたの

うぬぼれているのは

寧ろあなたのほう

何者のつもりなの

可笑しな話

馬鹿げた話

侮辱する暇があつたら
少しはその脳を鍛えてみてよ
あなたは馬鹿らしくって
嫌気もさすの

お馬鹿ちゃん
哀れなお馬鹿ちゃん

この私の人生は
この私のためだけにある
どう転がそうと
どう歩もうと
何人とも
邪魔なんて出来ない
自由でいいの
私らしくあつていいの

お馬鹿ちゃん
大きなお馬鹿ちゃん

邪魔なんてしないで下さる

微笑み

まるで

絵本の中の皇子様ね

あなたの微笑み

柔らかく

純粹で

大人のクセに

そう言いたくなるほど

温かい

笑い方している

どうせなら

そう言いたくなるほど

出会いの遅さ

少し悔やみたくなるの

いつそのこと

そう思わずにはいられないくらい

私の幼さ

悔やんでいるの

きつと子供だからって

きつといつものことだからって

あんまり相手にしてないでしょ

憧れの皇子様

こんな近くに

生きていたなんて

知らなかった

想像できなかった

絵本の中が現実になって

私は少し

夢見てる

シンデレラみたいに

あなたの笑顔に

少しの間

癒されて

あなたと出会い

気付いた感情

もうきつと

笑顔が怖いだなんて

思わない

あなたが与えてくれた勇気を
もう持っているから

あなたが私にくれたものは
とても大きな
素敵な感情

震える

魂が泣くみたいに
まるで赤子に戻ったかのように

耳から伝う
伸びのある
きれいな音を
聴いていると
身体はどこかで
魂が鼓動する

ドクンドクン
ドクンドクン
温かな熱を持って
全身にぱっと広がる
一種のエクスタシー
これぞ
本当の悦楽だと
歌声が
身体の中で跳ね返る

温かな意思をもった声は
まるで魔法のように
ぱあっと広がってゆく
馴染んでゆく

いつまでも耳に残るサウンド
幸せなサウンド
魂を抱く
そのサウンドが
鳴り響く限り
その震えはとまらない
とめられない

墜ちない

ちよつと突けば

墜ちるって

ちよつと声をかければ

何でものつてくれるって

勘違いしていない 君は

勘違いしないで

そんなに安くないわ

簡単じゃないの

私を手に入れるまで

必要な マナーと言葉選び

時間をかけてゆっくり

この間の溝を解いてみて

簡単なことよ

多分

ちよつと関係をもつて

おいしいとこだけ

ちよつと囁けられれば

あなたのものになるって

勘違いしているでしょう

君も

勘違いしないで
誰でもいいわけじゃない
何度も言わせないで

私が誰に似てるって
馬鹿にしないでよ
愚弄しないで

私は私
似てるなんてあり得ない
誰でもなく
間違いなく
この私は私

私は私の作法を持って
定理を持って
人を選ぶ
仕掛けられたトラップに
はまり込むほど
馬鹿じゃないわ

幸せ

人として認められたり
求められたり

それって些細なことの積み重ねだけれど
その些細なことが

ほんのわずか

色のない日常に

色を添える

素敵だと思えること

キレイだと感じれる心

それがあつて日常がやつと輝きだして

味気のない日々だけれど

そついう小さなことに

心動かされることから

始まつたりする

愛したり愛されたり

人間として大切なものを

味わえる日常にいれるから

随分幸せだと感じることもできる

満たされているってとても立派で

とても素敵なことなんだ

小さな事実に驚いて
それでいて
素敵だと気付く

小さなひとつひとつ
些細なひとつひとつに
心動けば
それだけで
幸せだと思えたら
最高だろう

苦しい

痛い苦しい

驚くほど

自分でも

どうしてこんなになっちゃったのか

分からないくらい

苦しい

胸の奥がとても痛いよ

今までにないくらい

どうしてこんなに苦しいのか

分からないけれど

そうやって

誤解されることも

嘘で塗り固められていく

仮の私に嘆くのも

疲れたし

苦しいし

とてもいいことなんて

ありはしなかったよ

どうして傷つけるの

勝手な想像でまとめちゃうの

苦しいのよ

逃れられない

こんな偶像から

私は逃げられないのに

酷い話ね

こーやって苦しめて

笑っているなんて

馬鹿にしないでよ

笑わないでよ

後ろ指なんて差さないで

本当の私は

嘘で塗り固めないと

立ってられない位

弱虫なんだから

しり込みしているんだから

そんな偶像をつくらせた

私の隙が

今はただ

悔しいの

メール

もう

普通の友達だけれど

やっぱり

あなたは

とても良い男ひとだって

そう感じてる

いつも優しくて

少し前を

ゆっくり歩くみたいな

あなた

感じている

その優しさ

溢れんばかりに

あなたが母のように言われること

いい加減気付きなよ

優しすぎるほど

惚れっぽくなくっても

一途じゃなくっても

慎重に深く

大切に

人を愛すること

あなたが半分教えていったこと
あなたがその手で
教えてくれたこと

あなたにフラれたこと
きつと後悔しないけれど
あなたの傍にそう
長くいれないことが
少し苦しいのよ
愛しているわけじゃないけれど
あなたという
素敵なひとりの男性に
寄りかかれないことが
少し苦しいだけよ

あなたに良く似た
優しい人に
少しばかり
今も惹かれて

来る
来ない
そんな返信を
少し心待ちにして

あなた

幸せだよ

あなたと出会えたことが

幸せだよ

あなたと話せることが

幸せだよ

こんなに日常が満たされていることが

苦しいこと

辛いこと

嫌なこと

そして

乗り越えたくない

面倒なことも

すべて

あなたが

充実感に変えてくれる

変えてくれた

あなたと出会えて

変われました

人と接するのも

初対面で話すのも
人と触れ合うこと
全然

怖くないし
脅える必要もないんだって
あなたが教えてくれた

噂に振り回されて

また不安に

不信感に陥ったときも

あなたが

話を聞いて

あなたが

真剣に考えてくれました

消せない

あなたからの

アドバイスのメール

些細な優しさも

強制的なコミュニケーションも

なにもかも

慣れないころは

迷惑だなんて

感じてたけれど

今は

あなたのおかげで

あなたに支えられて

また

笑うことができます

ありがとう

大切なあなた

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2167y/>

【詩集】かんりん

2011年11月24日19時54分発行